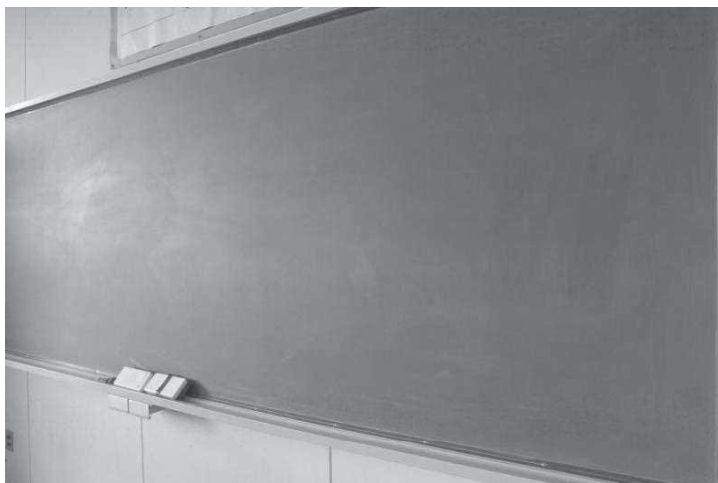


授業を大切に



教師間の情報交換を大切に！

教職を退職した今、振り返るともつとやっておけばよかったと後悔することが多くある。子どもが好きで教師になったが、肝心な学習指導は充分であったのか。

子どもたちは学校に夢を育むため希望に満ちてやってくる。それを具体的な形にしているのが教室という場、そして授業である。私たちが一番力をいれなければならない。

授業の主導権は教師にある。子ども一人ひとりを知り、その力を信じて、あらゆる角度からそれぞれの子どもを力を目いっぱい伸ばしていく。そして、学ぶことの楽しさや面白さを分からせてあげる。授業では、学ぶことへの意欲の喚起が重要になる。自分の力で課題を解決し、学習に能動的に取り組めるようにする。そのような授業になれば、子どもたちだけでなく我々教師も、間違いなく成長できる。という自分はそのような授業ができたというわけではない。自戒の意味も込め、今までの自分から思うところを伝えたい。

初任は小学校の小規模校。「人生の先輩」という思い上がりだけで、指導に当たっていた。しかし、子どもたちから教えられることは多かった。いろいろな経験は授業の中で非常に大切なものである。自分もそれなりに積んでいると思っただけだが、とんでもない。子どもたちの方が様々な経験を日々している。もつと多々のことを身につけておく必要性を痛感し、授業に対して高をくくって取り組んでいた自分を、恥ずかしく感じた。

数年後、大規模な中学校への赴任となる。自分からの異動希望ではあるが、小学校との違いに驚いた。理科を教えたが、授業はとにかく早く進め、ドリル中心の知識詰め込みであった。理科の面白さを教えられたとは到底思えない。余裕のない授業の毎日だった。時

間があればと思っただが、それで改善できたか疑問である。ただ、小学校と違って生徒が教師のやり方を絶対視していない点は氣を楽にさせた。小中一貫教育が叫ばれている昨今、ぜひ小・中学校両方を経験し、子どもたちの特性や授業の様子を知っておくとよい。

その後、今度は教師生活から一変、科学館への異動となる。理科の面白さを改めて自身学ぶ機会となった。特に授業の導入として使えそうなインパクトのある実験をいろいろと知る。もちろん奇抜な導入で興味を持たせても、授業の本質がしっかりとし、子どもたちに本来の学習課題を持たせられるようなものでなければ意味はない。科学館での経験は改めて授業への指導方法を考えさせられる機会となった。でも学校現場に戻ったとき、直接授業をすることは無くなってしまった。気付いたときには遅いものである。

授業を組み立てるとき、教材研究が大切であることは教師であれば誰でも知っている。正に教師の創造的な営みである。子どもたちや社会の変化に対応していく努力が私たちに求められる。興味関心を引き起こす教材研究が、学習に熱中する子どもたちの姿に繋がっていく。授業を絶えず意識し、身の回りのものをよく見て生活してほしい。ただ、自分ひとりだけの経験や努力には限度がある。私のように後で後悔することのないよう、いろいろな機会を活用して情報を得てほしい。教育委員会等の研修はもちろんであるが、特に、先輩方が作った小・中学校教育研究会の存在を忘れないでいただきたい。今までも多くの教師が、少しでも子どもたちに分かる授業をしたいと悩んできた。ぜひ教師同士の情報交換の場を大切にしてほしい。ちよつとした指導の変化が授業を変え、そして子どもを変えていく。私たちの仕事は子どもたちの人生を大きく左右するのである。

○ 忘れられない言葉

「それは、形成的評価だね。その実践をレポートすればいいんだよ。」その言葉は、研修会の課題についてのレポートを作成するとき、相談した先輩からのアドバイスでした。二十代前半だった私は、評価についてよく理解しておらず、「何をレポートすればいいのだろう。」と考え込みました。

数年後に栃木県教育研修センターに数学科で内地留学の機会をいただいたとき、「わかる授業の展開を目指した指導法の工夫（目標の明確化と形成的評価を通して）」をテーマとして研修をしました。そのときの先輩の言葉が頭の中に残っていたのでしよう。半年間の研修で、指導の先生から学んだり、評価や学習指導等に関する文献を読んだりする中、目標を明確にするために、数学科の四観点をブルームの理論と関連づけてとらえ、単元レベルで内容・目標行動マトリックスを作成し、単位時間における行動目標を設定しました。また、自己評価を基本にした形成的なテストとコース別学習を一単位時間として扱い、単元の指導計画に位置づけました。内地留学後は、各単元ごとにそれらを作成するとともに、生徒に対しては単元の学習計画が立てられるよう本時の中心となる学習問題、自己評価の観点等を明記した学習計画表を活用して指導しました。これらの実践は、私の学習指導における基盤となったものでした。

○ 数学科の仲間に学ぶ

「生徒に自ら学びとる力を育成したい。そのためには、教師の授業観の変革が求められている。しかし、授業の改善が個々の教師の力量や見識に任されているのでは、足利市としての数学科の授業のレベルアップにつながらない。学校の枠を越えて研究をしよう。」この実践は、足中教研数学会をあげての自主的な取り組みでした。研究の皮切りとして、昭和六十二年二月、勤務校において中三「関数」で数学的な考え方を育む学習課題の在り方をテーマとして、生徒の発想を生かした授業を展開し、市教委の指導主事や他校の先生方に参観していただきました。その後、市内中学校から推進委員が選出され、数十回を数える研究会を実施してきました。その後、その会議は、部活動指導後に集まり、シート学習や学習課題について協議をしたり、市内各中学校で実施できる評価問題を作成し、実施結果を分析したりしました。また、各中学校での実践を参考にして私が作成した中一「比例と反比例」の学習指導案を推進委員会で検討し、各中学校で実践して、その結果を持ち寄りました。そして、さらに研究を深め、昭和六十三年十一月に勤務校において栃木県中学校数学会教育研究大会の研究授業を行いました。協同研究を深めるために、足利市立北中学校セミナーハウスで宇都宮大学の木村寛先生を囲み、宿泊で研修を行い、深夜まで数学談義に花を咲かせたこともありました。三十代初めの私にとって、独りよがりにならないためにも仲間に学ぶことができたことは、教師としての大きな力となったものでした。

教職についてからの十年間での拙い実践の一端です。教師として、自らの不完全さを認識する中で、教育観の深化を図り、個人の努力と協同での取り組みが相俟って、自らの授業力が向上すると思います。これからの栃木県の教育を担う若い先生方、子どもたちの学業向上のために努力されることを期待しています。

よく無言で演示実験を行った。気分はサイエンスショーだが、そんなに格好良くはない。イオンの学習を始める時に、食塩（塩化ナトリウム）を使ってこんな実験を見せた。「実験から何がわかるか？」とだけ黒板に書き、説明することなく実験を始めた。

- ① 電源につないだ電極棒（＋、－の端子が出ている屋内配線用Fケーブル）を出し、電極棒の両端が導体に触れた時（挟んだものが電流を通す時）に電球が点く装置を示す。はさみ、鉛筆、消しゴムなど身近なものを電極棒で挟み、装置の働きを確認する。
 - ② 薬ビンの中から白い粉（食塩の結晶）を薬包紙にとる。物質名は伏せる。盛られた白い粉の中に電極棒を差し込んで電流が流れるかを見る。電球は点かない。
 - ③ A、B二つのビーカーに、水道の水を半分ほど入れ、電極棒をA、Bのビーカーの水に差し込む。電球は点かない。
 - ④ Bのビーカーに白い粉を入れてかき混ぜ、濃い水溶液をつくる。透明になったところで静かに電極棒を溶液の中に差し込む。電球はパツと点く。
 - ⑤ Bの水溶液をAに、Aのビーカーのふちからそつと注ぎ込み、静置させる。
 - ⑥ ⑤のAのビーカーに水面から底に向かって少しずつ電極棒を差し込んで行く。はじめ電球は点灯しないが、次第に明るくなり、グツと底まで入れると明るく点く。
 - ⑦ Aのビーカーの液体をかき混ぜ、⑥と同様に行うと、水面から底まですべて点く。
 - ⑧ あらためて白い粉を見せ、臭いを嗅いで見せる。最後に、怖々なめて見せる。
- 少々大げさな演技を織り交ぜながら①から⑧へと行った。実験後、各自に自分がわかつたことを記録させ、それをもとにグループごとに話し合わせ、まとめたことを発表させた。

この実験からわかることは、十項目以上あり、生徒は先を争って発表することになる。当然、疑問を記述させれば、「水溶液にすると電流を流すのは不思議」だという意見が出てくる。この疑問が、「なぜ水溶液にすると電流を流すのか？」という課題を解決したいという意欲につながる。この課題意識が、生徒を主体的な学習へと導くことになる。

無言実験は、喋りすぎる自分を戒めるねらいで始めたが、生徒は現象に目を凝らし真剣そのものになった。効果は大きい。敢えて「物質は何か？」とは問わない。人はそれが何かを知るとすべてを理解したような気分になってしまふからである。最後で良い。また、「何か？」の答えは単語だが、「何がわかるか？」の答えは多様である。それがおもしろい。生徒は、一人一人、見方や考え方、感じ方や表現の仕方が違うのだから当然である。初任のころの授業は、ゆとりがなく、目標に向かって自分が描くシナリオに乗せようと必死で、とにかくわかりやすく説明し発問を繰り返して教えようと意気込んでいた。我ながら、なかなかの情熱は認められるが、その強引な姿勢は、いかにも教師主導であり、生徒が主役の魅力ある楽しい授業ではなかったと反省している。

理科の目標は、科学的な思考力を育てることにある。それには、生徒が明確な課題意識のもと主体的に参加する学習が必要である。教材研究、適切な教材・教具が必要なのそのためである。無言実験は、学習の導入におけるほんの一例に過ぎないが、学習全体に生徒主体への方策が必要である。生徒が主体的になれば、コミュニケーションも豊かで、授業は楽しく、教師としての慶びを味わうことができる。

『教育再定義への試み』（鶴見俊輔著 岩波現代文庫）の中に、教師の資質について「子どもが好きだ」ということを前提とした上で、「①必要に応じた明晰、②成長のゆとりをのこすあいまい、その二つの共有が望ましい。」という内容がある。少し抽象的だが、この①②については私自身大いに同調するところであるし、これまでも先生方に話をしてきたことでもあるので、「読書」ということとあわせてメッセージとしたい。

言うまでもなく「授業」は、生徒にとっても教師にとっても「生徒の目的意識を支える一番重要な学校での営み」である。教育は子どもをよく見て、子どもにあわせて行うものである。授業を行うに際して、どう子どもたちに伝えるか入念な準備が求められる。子どもたちは、間違いなくわかりたい、知りたいと思っている。それにどう応えるか、非常に大変なことであるが、そこにこそ教育のプロとしての真骨頂があるのである。それに加えてさらなる教材の研究・工夫をおして、今学習していることの先には、こんなことがある、我々が教えていることはほんの一部で入り口にしか過ぎないことなど、学問の奥深さ、広さを垣間見せ知的好奇心を大いに刺激してほしいと思う。そして明確な見通しをもって、しっかりと背景を押さえた上で故意に「あいまいさ」を残し、子どもたちに考えさせるバランスのとれた「待つ姿勢」を持つことが肝要だと考える。

そしてもう一つ。今（再びというべきか）、教養教育の重要性が言われ始めている。その背景は間違いなく「グローバル人材の育成」に係るものだと思う。この「グローバル人材」に求められる資質については、

I 語学力・コミュニケーション能力

II 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

III 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

他に、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークとリーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシーなどが挙げられている（二〇一二年六月「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」文部科学省）。

これらの言葉を考えていると、古典的名著はもちろん、国内外の本をしっかりと読み、生徒同士で議論し、教師と問答をしながら、人生の意味や社会の中で人は如何に生くべきかを自然に考えていた、かつてのいわゆる教養教育で培われていたものに他ならないのではないか、そしてそれこそが学校の本質ではなかったのかと思う。生徒たちが熱心に勉強するのは大切なことだが、その学びはあくまで将来に向けて自らを高め、大学生活や社会生活を実り豊かなものとするために、目的意識をより明確にし、勉強意欲を一層旺盛にするものでなければならぬはずだ。その成長を助け、寄り添っていく本の果たす役割には計り知れないものがあるに違いない。だからこそ我々教師も常に学ぶ姿勢を忘れず、読書をおしてより一層教養を深め、生徒に語りかける意味があり、求められてもいることなのだと思う。

「教育とは夢を教えること、学ぶとは謙虚さを学ぶこと」だと言った人がいる。是非時間をつくって本を読み、それを生徒たちに話してほしい。夢を持たせる話、先生方の夢を語ってほしいと思う。

【三つ子の魂百まで】この格言を教員の教育活動に当てはめると「新採研修は定年まで」と置き換えることが出来るかもしれません。私も昭和五十一年に新採研修を受講しました。その研修には多種多様な内容が含まれていましたが、誠に申し訳なく思っておりますが多くは忘却の彼方に飛んでいってしまったかもしれません。しかし、新採研修の中のたった一言が私の教員生活の大きな基盤になっていたことも紛れもない事実です。それは「理科（生物）を教える（目的）」と同時に理科で教えてください（手段）」という講師の言葉です。理科の学習内容を教えることが授業の最大の目的ではありませんが、生徒達の高校生活以降の長い人生を考えてみると理科の授業で（授業を通して）生徒達に様々な「力（生きる力）」を育てていくことが重要なでしょう。それは、教育基本法の第一条の「教育は人格の完成を目指し・・・」と不岐であると考えています。我々教員の教育活動の全てはここに集約されると思っています。これが教育の最大の目標なのでしょう。

【手段はいっぱいある方がいい】目標を達成するためには手段が必要です。我々が目標を達成しようとしたときに、いかなる手段が最善かを考え実行に移すわけですが、その手段の選択肢は多い方がいいに決まっています。先述しましたように学校という教育の場において、各教科の授業はそれ自体が目的であるわけですが、その授業を通して人格の完成に向けた活動があるはずで。即ち、授業は手段でもあります。学校という場において他に手段は？と考えてみるとたくさんあります。部活動、ホームルーム、清掃活動等々です。

清掃は教室やトイレがきれいになっていけばいいわけではありません。清掃活動を通して生徒達が多くのことを学び成長する場なのです。ある時、生徒の問題行動の指導（ペナルティー）としてトイレ清掃を命じようという話題が持ち上がったことがありました。清掃活動も教育活動の一環とした場合には、罰やペナルティーとして清掃をさせることに、ある先生が反対しました。私も正にその通りと同感したことを思い出しています。

【いい先生とは？】いい先生とは？の問いかけに対する答えは多種多様で、どの答えが正しく、どの答えが正しくないかは判断できないことでしょう。多分全ての答えが正解なのでしょう。私としての一つの答えは「児童生徒とどれだけ共通の話題を持つているか？児童生徒とどれだけ共通の時間を過ごしているか？」その話題と時間が多ければ多いほど、いい先生に近づいていくのだという思いで教員生活を送ってきました。私の新採教員時代の同僚の先生で全く経験の無い剣道部の顧問を任された先生がいました。その先生は生徒と一緒に面を着け胴を着け小手を着けて稽古に励みました。学校での稽古の後には生徒に指導する立場からでしょう、町道場に通って技と指導力を高めていきました。やがて生徒と一緒に段位取得の審査を受審して有段者にもなりました。正に生徒と「共通の話題」「共通の時間」の充実のための努力であったと頭が下がる思いでした。その努力の万分之一ではありますが、その先生の範を見習ったの教員生活でした。教員は教科の準備室や職員室に籠もってはいけません。

私が教員になったとき、鉄筆とヤスリ板を支給された。プリントや試験問題等は、そのヤスリ板の上にロウ原紙を置き、鉄筆で原版をつくり（ガリを切る）、それをローラーで印刷した（ガリ版）。しかし、昭和が終わる頃になると、ワープロで作成した自作プリントが流行した。スライドやOHPの授業への活用は、研究授業の時はよく見かけたが、それ以外には特定の教員が使用するのみであり普及しなかったのに対し、プリントを使った授業は一般化した。当時、ワープロ専用機の登場により、パソコンは苦手でも、ワープロによる原稿の作成・編集・保存が容易になり、しかも簡易印刷機の普及によって、印刷も格段に容易になったことによる。その後、ワープロ専用機は姿を消し、パソコンそのものが普及し、パワーポイントや電子黒板等様々なソフトやツールが使われるようになった。

ところで、チョーク&トーク（教員が板書しながら講義をし、生徒は講義を聴きながら板書を書き写すという、授業・学習形態）は、今日、教員からの一方的な授業形態として分が悪い。確かに、一度作ったノートを更新もせず毎年同じノートを黒板に書き写し、それを生徒に書き写させる授業を揶揄して「チョーク&トーク」と言うのであれば否定的な意味合いは当然だ。

そこで、プリント（ガリ版から始まり、ワープロやパソコンで作成）、スライドやOHP、パワーポイント、電子黒板等様々なツールが授業で使われていることは、教員の授業改善のある種の試みとしては評価できる。しかし、板書（教員）と書写（生徒）の時間を省き、空欄の穴埋め作業をさせているだけであれば、学習者主体の学習活動どころか、むしろ、教員も生徒も、単純作業をしているだけで、思考が停止してしまっている。トーク（教員としての役割）がなければ授業ではない。新しいツールを単に従来の黒板とチョーク代わりに用いているのでは意味がない。実のところ、黒板を今日のパワーポイントや電子黒板のように使っていた先輩は間違いなくいたのであって、新しい機器を使えばそれだけで改善になるわけではない。チョーク&トーク（教員主導の一方的な授業）を否定したために、教育機器に頼り、チョーク（板書）もトーク（魅力ある語り）もできない教員を生み出している。いわゆるチョーク&トークだけではだめだが、チョークもトークもできない教員は論外である。

今日、パソコン、電子辞書、電卓がないと文章が綴れなかったり、調べ物や計算ができなくなったりしているのは、子ども（生徒）たちだけでなく、大人（教員）たちも同じである。

ある研究授業を参観した時の出来事だが、授業者が周到に準備をして電子黒板を使った研究授業を試みたが、機器の不具合で電子黒板が最後まで使用できなくなった。それにもかかわらず、その授業はちゃんと展開された。様々なツールを使いこなすことも大切だが、それがなくては授業ができないということでは教員は務まらない。黒板とチョークだけでも授業ができるだけの技量を磨いておいてもらいたい。大きな災害等が起こり、仮に長期間にわたり停電であったり、青空で授業をしたりするような状況下におかれても、黒板とチョーク、紙と鉛筆、地面と棒だけでも授業・学習ができるような状況下におかないと、教育におけるサバイバルはできなくなる。教育サバイバルを生き残れる教員になってほしい。

栃木県立宇都宮女子高等学校 木村直人

これまでの教師生活を振り返り、特に授業には全力で取り組んできたつもりではありませんが、生徒が満足する授業ができたかどうか改めて自責の念にかられます。同時に、多くの方々との出会いに恵まれ、いろいろなことを教えていただいたと思います。その方々への感謝の気持ちも含め、経験から学んだことをまとめてみたいと思います。

三十年以上も前になります私が初めて教壇に立った時、「教える」ということは本当に難しいと思いました。何をどのように教えたらいのか、最初のうちは黒板と自分のノートを見ながら授業をするのが精一杯で、一人一人の生徒の表情を見る余裕もありませんでした。今振り返ってみて恥ずかしいばかりです。「どこでどのような説明を加え、どこで生徒に考えさせるか」「生徒をどうしたら感動させることができるか」「どのような教材を利用すると効果があるか」「生徒にどのように働きかけたら意欲がでるのか」などで、学ばせていただきました。若い頃に学んだことが私の教師生活の基礎・基本となったと思います。生徒が学校にいる時間の中で、多くの時間を費やすのは言うまでもなく授業です。その授業がわからなければ、生徒にとって学校は楽しいはずがありません。「教師は授業で勝負する」と言われているように、授業は全力で取り組まなければなりません。生徒が学ぶ楽しさを感じる授業づくりの第一は、言うまでもなく徹底した教材研究です。「三を知って三を教えることは、危うい技であり、三を知って五を教えることは、欺瞞であり、三を教えるために十を知ることこそ良心的用意である」と言われるように、知識に

幅と深さがないと生徒を引きつける授業にはなりません。自分が教科書に書いてあることだけを理解しているつもりになっても生徒に根本的なことをわかりやすく説明することには繋がりません。一般教養や専門的な内容はもちろん、生徒が興味を抱いていることなどの雑学も含め、いろいろなことに関心をもつ習慣をつけておくことです。

第二のポイントは、「授業を創造する力」です。授業においては、目の前の生徒が何を理解し、何に戸惑っているのか手取るようにわかることがすべてです。そして、その時その時の生徒に応じた授業を展開していかなければなりません。授業には教えるツボがありそのツボを外すと「教師が教えたいこと」が「生徒の学びたいこと」にはなりません。

そのためには、教えるべきことをきちんと洗い出し、教科書や資料集を使ってどのよう
に授業をすすめていくか、授業づくりのポイントを明確にすることです。教科書を教える
のではなく、教科書で何を教えるかです。教師主導型の授業だけでなく、生徒が能動的に
なって取り組む学習を取り入れたり、目新しさを演出したり、学習スタイルのバリエーシ
ョンを幅広くもつことも大切です。生徒が感動するくらい専門性の高いことにふれたり、
実習の示範で職人技を披露し「先生ってすごい!」「目から鱗がおちた!」と思わせたり
することも時には必要です。

授業は一方的なものではなく「生徒との対話」です。生徒としっかり向き合い、生徒一
人一人をよく見詰め、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいこと
をおもしろく(井上ひさし氏の言葉より)」対話する力、まさにそれが「教師力」なのだ
と思います。教えることこそ最高の学びです。

三十八年間の教師生活を振り返り、私が実践してきた英語の授業と授業改善のための研修等について、また授業について日頃考えてきたことをご紹介します。

学力の向上については、言うまでもなく生徒と教師にとつて基盤となるのが授業です。先輩の先生方から「学校の生命は授業」「教師は授業で勝負する」「授業は知・徳・体」などと言われてきました。私たちは、より魅力ある授業をめざして、常に教材研究に熱心に取り組み、生徒に五十分の授業を保証して全力を投球しなければなりません。ある有名予備校の元理事は、生徒の授業評価を活用して、授業の満足度が七十五%以上であれば人気講師と呼んでいました。人気講師に共通していたことは、授業の準備に大変な時間を費やしていたことです。その年の最初の授業の場合、九十分の授業一コマの準備に平均七時間かけており、準備の半分は授業のシナリオ作り、残り半分の時間はどんな言葉を使って説明すれば分かりやすいかを考える、つまり言葉遊びをするわけです。

私は、英語を学ぶ楽しさを多くの生徒に教えたい意欲に燃えて教員になりました。しかし、教員になった二十代の頃は満足できる授業を実践できたことはあまりなく、自分は教師に向いていないのではと悩むこともありました。一時間の授業を情熱だけで無我夢中で教えていた記憶があります。それでも、教材研究だけは欠かさず専用ノートに教科書のコピーを貼り付け詳しい書き込みをしていました。五十代になってもこの習慣は続き、四十代頃からは、授業の導入あるいは復習の時にできるだけ英語で進めるために「英英辞典」を使い教材研究を行ってきました。

また、自分の授業で心がけてきたことに「音読指導」があります。大学時代の恩師であり同時通訳の神様として知られる國弘正雄先生は、「ご自身の英語習得の体験を踏まえて、「ひと通り意味のわかった英文をひたすら音読すること」を普及することに努めてきました。この学習方法を道元禅師のひたすら座る、その座ることが悟りの姿だとした只管打座に倣って「只管朗読」と命名しています。「英語の話しかた」「英語の学びかた」「烈士暮年に、壮心已まず」を読めば先生の考え方がよく分かります。私は國弘先生の提唱するシンプルな学習法「只管朗読」がまさに英語学習の原点であり、着実に英語力が身につく方法であると確信しています。

三十代の頃から、様々な研究大会に参加するようになりました。正直言つてその頃自分の授業に自信がなく、全国の先生方の授業から学びたい気持ちが強くなりました。「語学教育研究所研究大会」では毎年公開授業が行われ、最も卓越した授業で私が目標にしたいと思った授業は一九八七年に開催された、筑波大学附属高等学校教諭で後に教科調査官になった新里眞男先生の授業でした。オーラルメソッドを中心とした授業で、生徒たちの学習意欲や興味を見事に引き出していました。オーラルメソッドですべて英語で授業が行われましたが、この授業のDVDも出ていますので是非参考にして下さい。また、三十九歳の時にアメリカで半年間英語教授法の研修に参加する機会が与えられ初心に返って英語を学び直すことができましたが、それ以上に自分が学生として教えられる立場となり、褒められることがいかにやる気を引き出すかを実感することができました。

皆さん、いつまでも学ぶ姿勢を持ち続け授業改善に努め魅力ある授業を目指して下さい。

元 栃木県立石橋高等学校 江部 信夫

私が初任者だった一九七九年の二月初め、三年一組の「政治・経済」の授業。私は「高校最後の授業だね」と言って、結びにキャンディーズの「微笑みがえし」をはなむけに歌った。生徒はみんな拍手をしてくれ、歌い終わると、机、椅子を教室の後ろに移動させ、「先生を胴上げするぞー」と言って、私を胴上げしてくれた。たくさんの生徒が泣いていた。私も思いがけず、泣いてしまった。あの感動の場面が忘れられない。

思えば、初任者として教壇に立ち、教材研究に追われ、しかも野球部顧問で、放課後は毎日七時まで練習、土日も練習試合等があった。夜中遅くまで板書と説明事項を書いた授業ノートを作成して授業に臨んだものの、授業中居眠りしている生徒もいた。当時の私は、大学進学する生徒が少ないから学習意欲が低いんだと高をくくっていた。

一学期の途中、他の先生の授業を参観させていただいた。静かな語り口のT先生の授業は高校レベルを超える高度な内容で、教室がシーンとしていて緊張感さえ漂っていた。生徒から「教授」と呼ばれ、尊敬されていた。M先生はユーモアのある話し方で生徒を笑わせたり、ロールプレイをしてものごとを深く考えさせたりしていた。一方、ある先生は一方的に話すばかりで生徒をよく見ておらず、先生と生徒の心の距離を感じた。担当する先生の力量によって、授業も生徒の様子も大きく違うということ、そして自分の未熟さを思い知らされた。その後、私は授業ノートに、どの場面でどんな発問をし、どんな事例やエピソードを紹介するかも記入するようにした。いい授業ができないかと、試行錯誤と悪戦苦闘の連続だった。私はM先生から様々な教育関係の書籍を紹介してもらいよく読んだ。

それらの中で出会った「教師は教育のプロ」「教師は授業で勝負する」「学び続ける教師」「生徒がやる気がないのは先生のせいだ」などの言葉は、私の心の糧となった。

私は六年目、十七年目に異動し、二十二年目に総合教育センターに赴任した。センターでは、研究授業に数多く関わり、教頭・校長になって、たくさんの授業観察をしてきた。どの教員も良い授業をしたいと願っているが、残念なことは、生徒の満足度が低い授業が少なくなく、しかもその現実を教員自身が認識していないことと、授業のノウハウが教員間で継承・共有されていないことだ。高校現場には、ある教員にまづい点があっても、上司や先輩が遠慮して見ざる・聞かざる・言わざるといふ雰囲気がある。企業では、部下や後輩に対して、仕事に必要な知識・技能などを意図的・継続的に指導して修得させ、業務遂行能力を育成している。OJTである。高校にも、このOJTがもっと必要だと思う。

学力向上の原点は授業である。教員の第一義的な役割は、生徒の能力や適性を見出し引き出す授業をすることである。現在、基礎・基本の確実な習得、思考力・判断力・表現力の育成、生徒が能動的に学習するアクティブ・ラーニングなど、新たな学びを展開できる実践的指導力が求められている。教員同士が校内あるいは学校間でお互いに授業を開き、若手が先輩に質問したり、先輩が若手に助言したりするなど、授業力向上のために切磋琢磨する学校文化を作ってもらいたい。そして生徒の目が輝く授業をぜひ展開してほしい。

私は二十一年間授業をしたが、授業で胴上げされたことはその後一度もなかった。未熟さゆえの珍事だったのかもしれない。あの三年一組の生徒がいなかったら、私の授業への思いや教員人生は違ったものになっていただに違いない。